

親は子どもの家事をどのように評価しているのか —おこづかいと褒めに関するサーベイ実験を用いた検討—

○戸高南帆（東京大学）、尾藤央延（東京都立大学）

背景と目的

本報告の目的は、親が子どもの家事をどのように評価し、どのような手段で奨励しているのかを明らかにすることである。子どもが親の態度や行動を観察しながら、性別に沿った価値観や行動を学習・内面化していくプロセスであるジェンダー社会化は、家事分担の不平等を説明する重要なメカニズムの一つである (Cunningham, 2001; Raley & Bianchi, 2006)。先行研究では、親の家事行動やジェンダー態度が子どもに伝達されることや (Halpern & Perry-Jenkins 2016; Platt & Polavieja, 2016)、幼少期から家事の頻度や種類にジェンダー差がみられることが確認されている (Cunningham, 2001; 直井, 2009)。親を通して子どもが家事に関わる経験の差は、家事スキルやジェンダー態度の形成を通じて将来的な家事分担の不平等につながる可能性がある (Dotti Sani, 2016; 戸高, 2023)。しかしながら、ジェンダー社会化の具体的なプロセス、特に家事に関して親が子どもにどのような価値観や期待を伝えているのかについては、十分に検討されてこなかった。先行研究は、親を能動的なアクター、子どもを受動的なアクターとして位置づけることが多いが (Bisin & Verdier, 2001; Morawska, 2020)、その内実は明らかでない。本研究では、(1) 他の活動と比べた家事の評価、(2) 子どもの性別による評価の差、(3) お小遣いや言葉による褒めなど、評価の手段の違いについて仮説を立て、親を対象としたサーベイ実験によってその検証を行った。

データと方法

本研究では、2025 年 3 月にオンラインで実施したコンジョイント実験から得られたデータを用いた。日本の小学校高学年 (9~12 歳) の子どもをもつ父母を対象に、都道府県ごとの割り付けを行い、男女それぞれ約 800 名からデータを収集した。参加者には、小学 5 年生の子どもの特徴と様子を記述したプロフィールを読み、自分の子どもだと考えて質問に回答するよう指示した。プロフィールの属性は、(1) 子どもの性別、(2) 性格、(3) 将来の夢、(4) 学業での頑張り (まったく頑張っていない / あまり頑張っていない / 少し頑張っています / とても頑張っています)、(5) 学業の科目 (文系 / 理系 / 科目にかかわらず)、(6) 家事のお手伝いでの頑張り (まったく頑張っていない / あまり頑張っていない / 少し頑張っています / とても頑張っています)、(7) 家事の種類 (自分の部屋のそうじ / 夕食作り / 食後の片付け / 洗濯 / ゴミ出し / 風呂そうじ / ペットの世話) で構成され、各水準がランダムに割り当てられた。対象者は、お小遣いを与える条件と、言葉で褒める条件の 2 群にランダムに割り当てられ、それぞれのプロフィールを見た後に回答を行い、これを 10 回繰り返した。お小遣い金額 (0~10,000 円) を金銭的評価、言葉による褒め (11 段階) を非金銭的評価の指標とし、ランダム効果モデルで各水準の効果を推定した。

結果と議論

分析結果は、(1) 学業での頑張りと比べて家事での頑張りは高く評価されている、(2) 家事の頑張りの評価について子どもの性別による差はみられない、(3) 家事の頑張りは金銭よりも非金銭的手段で評価されやすい、(4) 親の性別や家事や子育てに対する態度によって効果の異質性がみられることを示していた (例えば、母親であるほど、男女にかかわらず家事をすべきであると考える親ほど、家事の頑張りをより褒める傾向がみられた)。これまで子どもの家事についての多くの先行研究ではジェンダー差が報告されてきたが、本調査の結果から、親の評価については子どものジェンダー差がみられなかった。このことは、家事についてのジェンダー社会化のメカニズムを検討するうえで、子どもを受動的なアクターとみなすだけではなく、自発的に家事に関心を示して親の反応や評価を引き出す能動的なアクターとして検討する必要性を示唆している。また、効果の異質性に関する議論は、育児を担う親の特性によって、子どもが家事にどのように関わるかが左右される可能性を示唆している。

(キーワード: 子どもの家事、ジェンダー社会化、サーベイ実験)